

## 序文とまとめ

居石 克夫<sup>1</sup> 磯部 光章<sup>2</sup>

本邦においては高齢化と生活習慣の欧米化に伴って動脈硬化性疾患が増えている。脳血管疾患、虚血性心疾患、末梢血管疾患、腎臓病の主要な原因であり、その発症予防、治療法の開発は国民的課題である。これまで病態に関する基礎的な研究成果が臨床に応用され、治療面で大きな進歩を遂げてきた領域であるが、なお臨床的な課題は山積している。

このような背景をもとに第47回総会で「動脈硬化研究の最先端と今後の展望」と題して会長のご提案で公募シンポジウムが企画された。これまでの成果を踏まえ、病態、診断、特に不安定病変の検出、薬物治療、インターベンションや再生療法などの非薬物治療など、基礎、臨床、疫学にわたる研究について最先端の情報に基づき今後の展望を論ずることが目標とされた。多数の応募をいただき、会長と座長の協議の下で6つの演題が採択されシンポジウムが行われた。いずれも最先端の知見に基づく質の高い発表であった。

薬剤溶出性ステント(DES)の出現でもなお再狭窄の問題は解決されていない。最新の論文によれば、DESが従来のステントに比べてPCIの遠隔成績や心筋梗塞発症率を改善していないことが報告されている。羽尾らは内膜形成の主体をなす血管平滑筋細胞の分化の観点から、多様な表現型をもつ平滑筋が病態において果たす役割について最新の知見を紹介した。再狭窄に対する新たな治療戦略の今後の発展につながる成果である。三浦らは合成HDLによる動脈硬化性心血管疾患の治療についての研究成果を報告した。脂質代謝の改善に基づく新たな治療薬として今後の発展が期待される。動脈硬化病変の非侵襲的画像診断は最近の臨床面での最大の研究課題である。特にhot plaqueの検出は臨

床的なニーズが高い。甲斐らはFDG-PETを用いて頸動脈プラークの描出を多数例で検討した。炎症巣で糖代謝が高まることを利用した画像診断である。報告によれば治療効果をも反映する。特異性、空間分解能、コストなどの問題をはらんでいるが、本邦では多数の施設でPETの導入が進んでおり、臨床的に有用な診断法の確立が望まれるところである。本号への掲載はないが、新藤は遺伝子改変マウス的手法を用いてアドレノメデュリンが血管病変形成に果たしている役割についての研究成果を報告した。本邦で発見され、発展したペプチドであり、臨床応用が始まっている成果である。急性冠症候群に代表される動脈硬化の急性イベントの病態診断と予防法の開発は現在の動脈硬化研究における最大の課題といえる。出口らは間質に存在するコラーゲン量に着目して、MMP-13の活性化がコラーゲン量の規定因子となりプラークの安定性に寄与していることを報告した。鈴木は血管病変を炎症病変と捉える中で、NF- $\kappa$ Bを特異的に抑制する遺伝子(NF- $\kappa$ Bドコイ)の開発を進めている。その効果について動脈傷害における基礎データに加えて、再狭窄予防に関する臨床データを報告した。今後の研究の中で問題点が明らかにされ臨床に応用されることが期待される成果である。

2006年の時点で非常にタイムリーなシンポジウムを企画された横山光宏会長に敬意を表し、御礼を申し上げる次第である。また応募いただきながら時間の関係で発表していただけなかった演題にも多数の興味深いものがあつた。ぜひ別の機会に発表していただきたく、お詫び少々御礼申し上げますの次第である。

<sup>1</sup>九州大学大学院病理病態学

<sup>2</sup>東京医科歯科大学大学院循環制御内科学